

誰が推し活を始め、誰が推し活をやめるか

情 島津 柚羽
指導教員 宋 財法

1. はじめに

推し活（推しを応援する活動）は、個人の趣味や自己表現としてだけでなく、社会的・経済的影響をもつ現象として注目されている。推し活は人々の心の支えや楽しみとなり得る一方で、時間や費用がかかる活動でもあり、それを始めたり続けたりする背景には多様な要因が存在すると考えられる。しかし、推し活を続ける人とやめる人の違いや、推し活の持続期間に影響を与える要因についての研究は限られており、この分野を深く理解することで、より多くの人々が充実したライフスタイルを構築できるヒントが得られるだろう。推し活を始める人の動機や、それを長期間続ける人と途中でやめる人の間にどのような違いがあるのかという疑問が浮かんた。また、推し活が人々の人生に与える影響や、社会的・経済的要因がその活動に与える影響にも関心を持ち、この問いを設定した。推し活は、趣味や消費行動、コミュニティ活動といった複数の側面を持つユニークな文化現象である。そのため、心理的な動機や社会的背景、経済的な制約など、多角的な視点から分析する余地がある。推し活をやめる理由に焦点を当てることで、熱狂的な趣味活動が人々の生活に与える負担や限界を理解し、より持続可能な活動の在り方を考える手がかりが得られる点が興味深いと考えた。

2. 仮説

本研究では以下の 3 つの仮説を検証する。①推し活をやめる人は経済的負担、時間的制約が原因である。②婚姻経験で推し活の有無の違いが見られる。③10 代後半～20 代の若年層は推し活を始める確率が高い。

3. データ・分析方法

2024 年 11 月 12 日～14 日に、楽天インサイトの登録パネル 3,725 名を対象に、推し活に関する世論調査を実施した。主要変数である推し活の有無について「やっている」「やっていない」「やっていたが、今はやめた」の 3 つの項目で測定した。他にも推し活をやめた理由（複数選択可）および年齢や性別など、回答者の社会経済的要因を測定した。

仮説①を検証するために、推し活をやめた回答者を対象とし、やめた理由の割合を確認する。続く仮説②は、婚姻経験別の推し活有無の割合を計算し、比較することで検証した。最後の仮説③の検証には推し活の経験の有無を応答変数に、年齢と性別、そしてその交差項を説明変数としたロジスティック回帰モデルを行った。

4. 分析結果

推し活をやめた理由については、「ライフスタイルの変化」（80 人・28.6%）と「気づかぬうちに興味が薄れていた」（72 人・25.7%）が上位 2 つを占めた。「ライフスタイルの変化」では結婚や仕事、学業などの環境変化が主因と考えられる。一方、「気づかぬうちに興味が薄れていた」は新たな関心の出現や生活環境の変化による自然な推移を示していると考えられる。仮説で注目した「経済的負担」や「時間的制約」は上位に挙がらず、経済的な理由を挙げた人も少数であった。この結果は、経済的要因が推し活をやめる主要な理由ではない可能性を示唆する。

次に、婚姻経験別の推し活状況では、婚姻経験がある人の 79.2%が「やったことがない」と回答し、婚姻経験がない人の 60.9%を大幅に上回った(図 1 参照)。一方、現在推し活を「やっている」割合は、婚姻経験がある人で 14.8%、婚姻経験がない人で 30.9%と約半分の差があった。過去に「やっていたが、今はやめた」と回答した割合も、婚姻経験がある人で 6.0%、婚姻経験がない人で 8.0%であり、婚姻経験が推し活を抑制する傾向が見られた。この結果は、結婚後のライフスタイルの変化が推し活に割ける時間を制約している可能性を支持する。ただし、婚姻経験が推し活の有無に与える影響については、時間的制約だけでなく経済的要因や心理的要素も考慮する必要がある。

また、推し活経験率を年齢および性別ごとに分析した結果、10 代後半から 20 代で最も高く、その後年齢が上がるにつれて減少する傾向が確認された(図 2 参照)。特に、10 代後半から 20 代前半の女性の経験率が突出しており、同年齢層の男性と比較しても明確な差があった。全年齢層で女性の経験率が男性を上回り、若年層、とりわけ女性が推し活を始めやすいことが示唆された。また、年齢層ごとの信頼区間が全体的に狭く、モデルによる推定の信頼性が高いことが確認された。これらの結果は、若年層、とりわけ女性が推し活を始めやすい環境にあるという仮説を支持するものである。

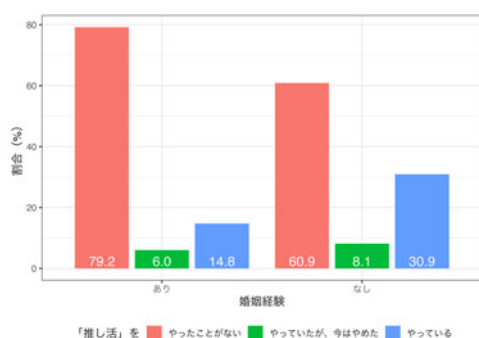


図 1. 婚姻経験別推し活の有無

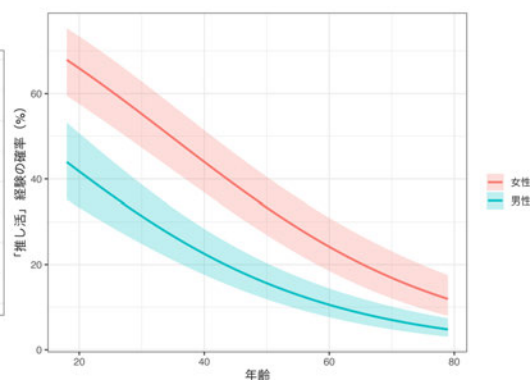


図 2. 男女別「推し活」経験の確率

5. おわりに

本稿では、推し活を始める人とやめる人の特徴や動機を分析した。推し活をやめる理由としては「ライフスタイルの変化」や「興味の薄れ」が挙げられ、結婚や仕事、学業といった環境の変化が影響している可能性が示された。また、婚姻経験がある人は自由時間の制約により推し活が抑制される傾向が見られた。年齢や性別では、若い女性が推し活に積極的であることが明らかになり、自由時間や社会的背景が推し活に大きく関与していると考えられる。本研究は日本国内のデータに基づくため、国際的比較や他の趣味との比較研究が必要である。推し活の社会的・経済的影響をさらに解明することが今後の課題となる。